

平成 29年度 学内研究助成金 研究報告書

研究種目	<input checked="" type="checkbox"/> 奨励研究助成金	<input type="checkbox"/> 研究成果刊行助成金
	<input type="checkbox"/> 21世紀研究開発奨励金 (共同研究助成金)	<input type="checkbox"/> 21世紀教育開発奨励金 (教育推進研究助成金)
研究課題名	韓国語教育のためのタスク別書き言葉コーパスの構築と分析	
研究者所属・氏名	研究代表者： 文芸学部 教養・基礎教育部門 小島大輝 共同研究者：	

1. 研究目的・内容

本研究は、韓国語母語話者が書いた特定の人物宛てた依頼メール文を分析し、メール文の展開と文中における表現の使用様相及びその特徴の記述を目的とするものである。一般に公開されている日本語母語話者のデータとの比較も行うことで、韓国語母語話者のメール文の特徴をより鮮明にすることを試みる。

2. 研究経過及び成果

本研究で扱うデータは、特定の人物宛の依頼メールを韓国語で書く、というタスクを課すことによって収集を行った。日本語教育の分野ですで行われている研究手法を参考にしつつ、今回の調査では、「①面識のない大学教員に本を借りる」「②親しい友人に本を借りる」「③以前、授業を受けたことがある大学の教員にアンケート調査の依頼をする」「④少し面識のある後輩にアンケート調査の依頼をする」「⑤指導教員に留学のための推薦書を依頼する」「⑥指導教員に進路相談の依頼をする」といった6つの依頼メールタスクを設定した。データの収集にはノートパソコンを用い、あらかじめ作成しておいたテンプレートに、実際に送信することを想定して直接入力してもらうよう指示した。現在のところ、収集できたのは日本在住の韓国語母語話者（以下、韓国人）24名分、144ファイルである（調査実施当時、調査参加者は日本に留学中の学部生13名及び大学院生11名）。得られたデータは、調査参加者が特定されないように、個人名やメールアドレスなどの個人情報を記号に置き換えるなどの手段で、データを適宜補正した。

本研究では先行研究における分析手法を用い、以上に示した①から④までのデータをもとに、韓国人が特定の依頼メールにおいて、実際にどのような語彙や表現を使用するのかを分析した。まず、分析の前段階として先行研究の分類に従い、メールを題目等が書かれる「件名」、宛名や挨拶等が書かれる「開始部」、依頼内容が中心に書かれる「主要部」、メールを締めくくりに書かれる「終了部」のように、メールが展開される枠組みを分類するとともに、呼びかけ、説明など、相手に対する働きかけの機能を担う最小部分と考えられる単位である機能的要素が見られるかを検討した。その際に、同様のタスクを扱った日本語の書き言葉コーパスのデータとの比較も行ったところ、次のような結果が得られた。

メールの「件名」や「開始部」では、교수님 안녕하세요.
(先生、こんにちは。)や「영근아~!」(ヨングン~!)のように、韓国人は[呼びかけ]や[挨拶]を用いる傾向があった。

特に教員宛のメールにおいては、ほとんどの調査参加者が [挨拶]として안녕하세요や안녕하십니까を用いていた。これに対し、日本人も[挨拶]を用いるものの、面識のない人に対しては「はじめまして」を用いるのがほとんどであり、また、依頼をする前になんらかの[詫言]をすることで依頼相手への負担に対する配慮を示す傾向が見られた。「主要部」では、主として動詞빌리다(貸す)や빌려주다(貸してやる/貸してくれる)が用いられ、そこに可能を表す-(으)ㄴ 수 있다(-できる)や許可を表す-아도/어도 되다(-てもよい)が続き、さらに伺いを表す語尾-(으)ㄴ까요?, -ㄴ가요?(-でしょうか)などが後続する、依頼の婉曲化が頻出することが確認された。また、[依頼]に入る前の前置き表現として, 다음이 아니라, 다음이

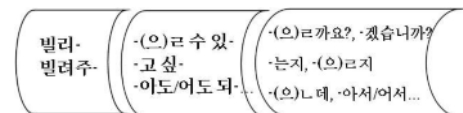


図1. タスク①の[依頼]に使用された語彙

아니오라 (ほかでもなく/実は) や혹시 -(으)면 (もしであれば) といった特徴的な表現がいずれのタスクにおいても頻出しており，韓国語でなんらかの依頼をメールで書く際には有効な表現であることを示唆している。「終了部」では，메일 읽어주셔서 감사합니다. (メール読んでくださりありがとうございます) のような[感謝]が教員宛のメールに見られた。これは日本人のメールには無い要素であった。また，友人や後輩宛のメールには，밥 사줄게 (ご飯おごるよ) をはじめとした，[謝礼]の表現が確認された。これは，食事やコーヒーなどを対価として提供するという，依頼相手への負担に対する配慮であると考えられる。洪珉杓 (2006) では，韓国人は不満表現のストラテジーにおいて補償型のストラテジーをとる率が日本人より 2 倍以上高いことを述べているが，今回の結果は，このことと関連しているのではないかと考えられる。

3. 本研究と関連した今後の研究計画

今回と同様のタスクをもって，より多くの母語話者にデータの提供を依頼し，まだ手を付けていないデータとともに分析する予定である。そして，各タスクにおける特徴的な語，表現を抽出することを試みる。また，さまざまな配慮表現が用いられていたが，整理が及んでいない部分が多いため，こちらの方も順次，整理していく予定である。そして，継続的にデータ収集を行い，公開の許可を得られたデータについては今後，なんらかのかたちで研究及び教育目的で公開できればと考えている。

4. 成果の発表等

発表機関名	種類 (著書・雑誌・口頭)	発表年月日(予定を含む)
朝鮮語教育学会	口頭	2018年6月17日